論文要旨

近代共同体主義を超えたユートピアの考察

複雑系経済学とハイデッガーの技術哲学を手掛かりに

氏名：赤木　茅（経済学部三年）

指導教員：長谷川　淳一

論文要旨

資本主義の発生から現代までのその変遷に伴って一種のユートピアとしての共同体を創りあげようとする共同体主義的運動が各地で展開されてきた。現在日本でもインターネットのコミュニティーなどに基づいて作られた“ギークハウス・プロジェクト”のように幾つかの共同体運動が展開されている。しかし、現在展開されている共同体主義的な運動は、産産業革命以降の資本主義の急速な発展への対抗運動として現れたフーリエ主義やオウエニズムなどの近代的な共同体主義とは、“経済･社会的機構の保持”という観点で異なっていることが観察される。本稿はその差異が、どのようにして生まれ、また現在の共同体の運営がどのように可能となったのかを考察し､人々が共同体を通じて構築しようとしている“ユートピア”とはどのようなものであるかを論じるものである。

現在の経済や社会は、現代共同体においては一つの道具として利用される立場にある。そこで、道具としての経済社会のあり方を、道具の生産を社会の構築の要件とするマルクス主義及び、テクノロジーの創発を扱うブライアン=アーサーのテクノロジー論と複雑系経済学をもとに提示した上で、そのようなモデルの中で取り扱われない人間の主観を、技術が人間に対してどのように現れ影響を与えるかを扱ったハイデッガーの技術哲学に基づいて考察する。

この前提によって人間に害悪として現れる経済社会とは、自己組織化するテクノロジーの集合という「環境」としてみなされるのであるが、そのような集合は、人間がその周囲に理解不可・統制不可の外部として存在する「環境」を自らの統制と理解の下に置こうとする運動、即ち“開蔵運動”の反復的な帰結として発生すると仮定することが可能である。この「環境」の下で人間は、その快楽と功利の源泉である“開蔵運動”における主体性を、その能力の限界性によって喪失するという疎外を経験する。そ

の疎外から身を守り、快楽の確保を行うことこそ人々がユートピア的共同体を形成する誘引なのである。そして、本稿ではユートピアが、反復的な開蔵運動という人間の営為によって必然的に刹那的にしか存立しえないことを示した上で、継続的な発展と投資に基づいた一時的且つ形式的な達成の連続こそが唯一可能な妥協的ユートピア像であることを示す。